T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	中期ビザンツ文化圏における内接十字型教会堂の架構形式からみた建築構成の特質と系譜
Title(English)	
著者(和文)	樋口諒
Author(English)	Ryo Higuchi
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10846号, 授与年月日:2018年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:那須 聖,奥山 信一,中村 芳樹,元結 正次郎,藤田 康仁
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10846号, Conferred date:2018/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

（博士課程）

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第　　号		学位申請者氏名	樋口　諒	
論文審査 審 査 員		氏　名	職　名	氏　名	職　名
	主査	那須　聖	准教授	藤田　康仁	准教授
	審査員	奥山　信一	教授		
		中村　芳樹	教授		
		元結　正次郎	教授		

論文審査の要旨（2000 字程度）

本論は「中期ビザンツ文化圏における内接十字型教会堂の架構形式からみた建築構成の特質と系譜」と題し、以下の７章から構成されている。

第１章「序論」では、研究の背景として、初期ビザンツ建築と中期ビザンツ建築の間に断絶が存在しておりその系譜の理解に困難があること、その中でビザンツ文化圏の教会堂として最も一般的な内接十字型教会堂と先行する教会堂との関係性が不明瞭であることを述べた上で、内接十字型教会堂に関する既往研究がその立体的な特徴を等閑に付して平面的な分析に終始し、さらに中期ビザンツ建築として包括的かつ体系的な分析を行ってこなかったことを批判的に捉えた上で、総体としての中期ビザンツ建築を体系的に理解するための時間的および地理的な枠組みを設定し、その上で、8 世紀から 12 世紀の中期ビザンツの間に最も一般的な建築形式であった内接十字型を対象に、従来見過ごされてきた立体的な特質としての架構に着目して検討を行うことにより、その特質と系譜を明らかにすることが本研究の目的であることを述べている。

第２章「中期ビザンツ建築研究の概要」では、既往のビザンツ建築研究と内接十字型研究を概観し、内接十字型がこれまでの研究者の中である程度の合意は取られてきたものの、横断的な定義が存在しないことを指摘し、その上でこれまで内接十字型として捉えられてきた教会堂を可能な限り多く含み得る本研究における内接十字型の定義を規定している。

第３章「分析対象遺構の選定と内部構成の概観」では、第２章で設定した内接十字型の定義に基づいて分析の対象となる教会堂を抽出し、それら 157 棟から年代考証を通して中期の教会堂と判断された 145 棟の教会堂のうち現地調査および各種既往研究から十分な情報を得られた 92 棟を分析対象遺構とし、それぞれの詳細を架構的な特質に着目して記述し、次章以降で詳細に分析を行う高さ方向の特徴が異なる内接十字型の構成として、地面から垂直に立ち上がる壁面を中心とした下部壁面とその上に載る天井面を構成する上部天井面を規定し、架構構成の特質を検討する項目とその妥当性を明示している。

第４章「下部壁面における架構構成の特質」では下部壁面の架構構成について、上部アーチの配列形式、平面形式、隅部柱の架構の形式、および隅部柱と上部アーチの接合形式の４つの架構形式の組み合わせから 22 の型を見出し、それぞれの比較対照によってその特徴を明らかにするとともに、内接十字型の下部壁面の架構構成は大きく壁の構成として捉え得る場合と柱の構成として捉え得る場合とに分けられることを明らかにしている。

第５章「上部天井面における架構構成の特質」では上部天井面の架構構成について、天井面の個数、各コーナーベイにおける横断アーチの個数および上部アーチの配列形式の 4 つの架構形式の組み合わせから 12 の型を見出した上で、それぞれの比較対照によってその特徴を見出し、内接十字型の上部天井面では、コーナーベイの天井面無しに隣接する天井面を構築不可能な場合と、コーナーベイの天井面と隣接する天井面とを独立して構築可能な場合の二つに分けられることを指摘した上で、前者の場合には上部アーチの高さ関係とコーナーベイの天井面架構が完全に対応しているのに対し、後者の場合には 10 世紀までは上部アーチの高さ関係とコーナーベイの天井面架構にある程度の相関関係はみられるものの、11 世紀以降次第にこの相関関係が低下していくことを明らかにしている。

第６章「中期ビザンツ文化圏における内接十字型教会堂の特質と系譜」では、前章までの検討を総合して、内接十字型教会堂の建築構成について類型化を行い、架構形式の相違に基づいて建築構成の展開を考察した結果、二つの異なる系統を見出し、さらに、それぞれの系統における建築構成の類型は時代と共に拡散していくが、一方でその建築構成の時代による変化が対照的であるために、既往研究のように平面的にこれらの教会堂を捉える場合は一つの建築形式として捉えられる可能性があること、さらにそれぞれの系統について、その地域性を踏まえた上で先行する建築群との建築構成の比較対照を行うことによって、内接十字型の系譜について明らかにしている。

第７章「結論」では、以上を総括して、本論の結論を述べている。

以上を要するに、本論文は、中期以降のビザンツ建築における最も一般的な建築形式である内接十字型について、これまで看過されてきた立体的な構築物としての特質を捉えて体系的かつ包括的に検討したものである。その結果、平面的な特徴を中心として議論していた既往研究では捉え得なかった教会堂の特質から、これまで内接十字型として一括りにされてきた教会堂群が異なる系統の建築群として捉えられることを示すとともに、立体的な特質により見出される中期ビザンツの内接十字型教会堂の史的展開、地域性、および先行建築群との関係性を統合することによって、その系譜を明らかにしており、ビザンツ建築に関する新たな知見を提出している。従って、本研究の成果は建築学および工学において貢献するところが大きく、本論文は博士（工学）の学位論文として十分価値のあるものと判断される。